

# ふるさと風

第86号 (2013年7月)

風に吹かれて (64)

白井啓治

『もう少し未だもう少し走ろうと紫陽花に呟く』

今年の庭の紫陽花、例年と全く違うワインレッドの色で咲き始め、なかなか薄紫色に変化してこない。以前に見たことのある、深いビロードのようなワインレッドではないが、ワインレッドに花開いている。特別肥料を与えたりしていないのだが、お犬様がよく紫陽花の木の下でオシッコをしていたので、どうやらその影響なのかしらん。

ネットの情報を見ていたら、『唐十郎の劇団「唐組」まだまだ走る』という記事が出ていた。小生の大学の少し先輩にあたる人で、映画に移る前にちよっとした縁もあったりして赤テントにでも行こうかと思っただけでもあった。そんなわけで唐組の記事を見て小生も「もう少しだけ未だもう少しだけ」と思わず呟いてしまったのである。

アベノミクス効果だ、なんだと騒いでいるうちに、大事なことを何も決められずに国会が終了して、参議院選挙なのだという。どの党の公約だとかという、言いつ分を見ていても、どれもこれも碌なものがない。そういうとお怒りを頂きそうだが、実際のところどこに投票をしようとも、何かが変

わる期待も持てない。論点・争点の良く見えない話ばかりである。これでは投票率は良くはならないだろうと思う。

選挙のたびに思う事なのであるが、投票率が50%、いや60%を下回ったら。その選挙を無効にしたらどうであろうか。そして、選挙のための助成金の様なものの支給を止めてもう一度仕切り直しをする。選挙成立の投票ラインに届かなかつたら何度でも繰り返す。それだつて税金が無駄に消費されるのだから、一回仕切り直しするたびに議員報酬を半分にカットする。いろいろな考え方があり、また見方があるが、そんな冗談のようなことを大真面目にやってみたらどうだろうか。

どんなに馬鹿げた事でも、それを大真面目にやってみると、そこからとんでもなく素晴らしい発想が生れてくるものだから、理屈を捏ねている前にやってみることが良いだろうと思う。

何かを提案したりすると、必ず知ったかぶりを振り回し、それを潰そうとする。そうして潰しておいて策がないと言う。全く無責任な言動である。

折角の選挙なんだから、選挙についてかなりの短絡はあるが、少し勝手を言ってみたいと思う。冷静に、そして客観的に今の選挙を見てみると、自立・自活を放棄した内容のように思えて仕方がない。選挙とは選挙民の自己責任を問うものだと

言ったら、なんだそれはと思う人が大勢いるだろう。

議員の選出は何かをして貰う為に選出するのではなく、何かをさせるために選出するのが基本である。何かをさせるうえで、Aが得意な人、Bが得意な人と色々居るだろう。そうした中で、今はAが優先事項だからその得意な人を選ぼう、となるのである。そしてそれが話と違うのであれば、主権は選挙民にあるのだから辞めさせればいいのか。当選者は、犯罪行為がない限り任期満了までそこに座っていられるなんてことはないのだから。

## ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

どうも選挙前に言っている事と、選挙後の言動が違う時には、ややこしい手続きはあるにせよ主権は在民なのだから辞めさせられるのである。

選挙のたび思う事なのだが、投票有権者に民主選挙の意味が十分に理解されていないように感じています。当選議員に何か不都合があったりすると、私はあの人に投票していないから、私はあの党に投票していないからといって、その当人に投票しなかったことが免罪符のように言っているのを耳にする。

今更ではあるが民主選挙の意味とは、多数決の原理であるが、その多数決の原理の根底には、決の結果責任は賛成者だろうが反対者だろうが同等に負うもので、投票時に賛成しなかったからと言ってその責任を負わなくて済むという事ではないのである。一票の重さとはそういう所にもあるのである。

極端な仮の話ではあるが、憲法が改正されて戦争放棄が無くなり、徴兵制度が復活したとしよう。その結果に対して、私は反対したというのは免罪符の理由にはならないし、徴兵制度を免れるわけではないし、戦争が始まれば兵隊として人を殺しに行かなければならないのである。

また、民主選挙というのは勝てば官軍という理屈はないのである。だが、残念なことに未だ数ばかりだという論理がまかり通っていて勝てば官軍なのである。そんな中で屁理屈の言い合いを論議だとの錯覚の上に立って、議論は尽くしたので多数決、というのではあまりにも情けなく野蠻である。

この町の将来をこういう風にしろ、この国の将来をこういう風に構築しろ、とその任を与えられたのが議員であって、あの人が議員になったらあ

あして欲しい、こうして欲しいというおねだりの選挙であってはいけないのだ。

権利には必ず義務が表裏一体にある。選挙行動というのは権利行動だけではなく、それ自体が義務行動でもある事を忘れてはいけない。民主主義というのは、実は自己責任主義であると認識することも重要である。民主主義には他責にして逃げるといふ考えは存在しないのである。

## 文明の暴走(2)

菅原茂美

【日本では「文化」と「文明」は、ほぼ同義に用いられているが、広辞苑によれば、西洋で、文化とは、人間の精神的生活に関わるものを言い、技術的発展のニュアンスが強いものは文明と言うこととなっている。しかし、私は両者を明確に区別することなく、話を進めることとする。】

「文明は大河のほとりに栄える」とよく言われるが、それはユーラシアやアフリカ大陸での話。マヤやインカの文明は、大河など無い山岳地に繁栄した。要するに多くの人口を支える食糧が豊富なら、文明はどこでも繁栄しようが、人口が増え、山林を切り開き、水源を失ったり、環境汚染が進めば、自ずと食糧生産が追い付かず、文明は崩壊していく。食糧難や内乱・侵略などが文明崩壊の基本であろう。

そもそも、〇〇文明とか△△王国などという古代文明は、独断と偏見かもしれないが、私の推測では、恐らく部族の中で特段に賢く、腕力もあり、強欲なものが首領となり、徒党を組んで近

隣から食糧や土地などを掠め取り、勢力を拡大していく。最初は単なる一豪族であったが、そのうち、我こそは「王なり」と宣言し、君臨する。(取り巻きも、己の利を図るため、その旗振りに懸命。泥仕合のような権力闘争を繰り広げて身内の安定を確立する)。それが、代を重ね、王侯の子孫は、部族の繁栄のために、初代や先代を「祖先霊」として崇め、社(やしる)やピラミットなどを造営し、儀式など、祀り事を繰り返す。

おそらく、「サクラ」だと思いが、シャーマンが失神状態を演じ、「神のお告げ」とか言って、打ち合わせ通りのストーリーを、口籠るように物語り、祖先霊を益々神格化して、一族の結束強化の芝居を演じる。こうして古代文明は栄えたに違いない。しばらく王朝が長続きすると、欲の深い者が内部に萌芽し、隙あらば…と王権転覆を狙う。それが内部崩壊である。あるいは近隣部族が、虎視眈々と侵略を目論む。動物行動学から類推し、私はそう考える。そうして長年続いた〇〇文明は崩壊していく。『奢れるもの久しからず』。

こうして人類は、大脳を膨らまし、多くの文明を築いてきた。しかし、それも自然をあまり破壊することなく、慎ましやかなら、『偉大な…』と、称賛してもよい。

ところが近年のように、自然の生態系を破壊し、汚染物質を垂れ流し、資源は枯渇するまで略取する。その結果、子孫が安住できない惑星に変貌するならば、もはや我々の文明は暴走どころではない。種の滅亡へ突進していると言わざるを得ない。それゆえ世界は、何はさておき、まずこの暴走に歯止めをかけなければならない。

こんな田舎の一老人が、大声でわめいてみると

ところで、どうなるものでもないが、智慧ある指導者が、世界に充ち溢れているのに、世界は、一向に改善が見られない。自分さえ良ければ…、自分の国さえ良ければ…に、凝り固まり、百年・千年先の世界のあり方など眼中になく、今の今、いかにして自分や自国を有利に展開させるかに、汲汲として自国の浅智慧からくる環境汚染・資源枯渇など。そして、世界各地で起きた航空機や列車など文明を象徴する交通機関の巨大事故。大量破壊兵器開発競争など、折角大脳を膨らましたのに、ちつとも改善されていない。宗教対立や、テロの横行など、文明は滅亡へ一直線。

世界の安全保障のため、折角国連など、国際機関が生まれたのだから、そのような機関が強力な権限を発揮し、反社会的な行動は断じて許してはいけない。強欲な乱暴者は、国際機関が厳しく抑え込む。今、世界に課せられた喫緊の課題である。

\* \* \*

そもそも私がこのテーマで、ものを書くこうと思つたのは、2005年4月25日、JR福知山線で107人の乗客乗員が亡くなった列車事故を検証するという、テレビの特集を先日見たからである。

外国の交通機関の出発時刻など、かなりルーズなもの。人が集まれば定刻より早く出発したり、運転手の寝坊など話にならない理由で、1時間ぐらい平気で遅れたりする。日本では、考えられないようなルーズさである。それが良いとは言われないが、厳格過ぎると、臨機応変の現場判断が狂い、とんでもない結果を招くこともある。効率主義には、恐ろしい「穴」がある。

日本では、列車などすべて定刻通り運行するの

が、文明国の誇りみたいな概念が強く、運転手はそれに強く縛られ、カーブなど減速せず突っ込む。深夜運行の長距離バスに交代要員をおかない。安全より利益追求が優先。社会システムが万事こんな風で、人間が創ったシステムを守るため、向こう見ずの暴走を繰り返す。営業利益が一定線に到達しなければ、支店長はすぐクビ。あまりにも余裕のないガンジガラメの諸々の規定。時によってはその規定に反発したり、逆に慣れっこになり、それを無視したりする。するとそれがアダとなり、多くの命が犠牲になる事さえあつたりする。

2012年12月、中央自動車道・笹子トンネルの天井板崩落事故で9人も死亡した事件も酷い話だ。コンクリートで固めた天井板の留め金が、建設以来、35年も経っているのに、劣化したり、外れたりするわけがないという先入観が、その点検を、いい加減にしている。先日、この件は、設計・施工・点検全て不備だったという結論が出た。人間が造った釣り天井なら、いつかは落ちる。それを心配するのは、「杞憂」だと意に介さない。杞憂なら天は落ちてこないが、天井は「天」ではないので、人が作った物は、いつかは壊れる。永遠の構築物はない。経営者は、金のかかる余計なことは全て削除したい。結果は、あれだけの重大事故につながった。これが文明国なのかと呆れかえる。

\* \* \*

さて文明の暴走として、すぐ思い浮かぶのは、1912年の不沈豪華客船と言われたタイタニック号が氷河に接触し沈没した事件（死者1513名）。1985年の日航ジャンボ機が群馬県御巢鷹山に墜落した事件（死者520名）。世界に数々あ

った列車事故など数え上げたらキリがない。更には炭鉱の落盤事故やコンビナートの石油タンク爆発等、瞬間に多数の命が失われる。これらは安全神話に取りつかれ『もしかして…』と、一歩下がって、身構えるゆとりも習慣もなくした効率主義のなれの果てだ。

福島原発事故は、創られた安全神話の慢心から起きた悲惨な人災だ。文明の頂点のような、「神の領域」に手を出し、その完全なるコントロールテクニクをマスターしきっていないのに、「金の亡者ども」は、言わば、見切り発車をしたも同然。経済至上主義にとられた未熟社会の姿だ。

しかし考えてみると、これらの事故は、単発であり、局部的とも言える。もっと大規模で、人間の存亡にかかわる文明の暴走事件は、他に沢山ある。緩やかで気が付きにくいかもしれないが、「地球温暖化」の進行は命取りの重大事。人間の振る舞いのおかげで、こんな環境悪化は、全ての生物にとつて、とんでもない巻き添え事件だ。

人類という無謀な動物が、ヤケにはびこり、他の生物の存亡を支配するなど、言語道断。人類も自然界の単なる一種の生物であることを忘れてはいけない。それゆえ、他の生物の「生殺与奪の権利」など、当然人類にあるわけがない。家畜を育て、殺して食べる人類とは、一体何者だ？

もしも進化の過程で立場が逆転し、豚の方が頭脳発達先行。ヒトを家畜として食糧にしていたら…などと考えたりする。ばかばかしいがそれは紙一重であつたと思う。

地球温暖化が進めば、両極の水が溶け、爆弾低気圧・ゲリラ豪雨・風速<sup>93</sup>級の巨大竜巻など異常気象が頻発。低地は水浸し。海面は過去に10

0 ぐらい何度も上下している。(1万5千年前の氷河期、ベーリング「海峡」は、今より水深が90 ㊦も低かったために、モンゴロイドは歩いて「海峡」を渡り、北米大陸へと進出できた。)

温暖化が進めば、致死率の高い熱帯の伝染病は、中緯度地帯に蔓延し、手の施しようもない状態が見え見えである。複合汚染と温暖化が重複すると、本当に地球環境は、生物の棲みにくいゴーストタウンと化する可能性がある。人類は万物の霊長などと言って、自惚れているが、巻き添えを食った他の生物はとんでもない被害者である。

産業革命以来、地球気温は確実に上昇が続いている。産業発展の肩を持つ変な科学者は、ちよつとの気温上昇ぐらい大した事はないとうそぶく。極端な被害妄想も困るが、超楽観論も困りもの。

【小さな島でバツタ(飛蝗)が異常繁殖。草を食べつくすと大量に海に飛び出し、殆どが死滅する。残ったわずかが「種」を存続する。人類も、今や地球が1.4個必要と言われるほどに過剰繁殖。人類が作り出した温暖化・公害・資源枯渇などで、大方が死滅すると、エスキモーやネパール人ぐらいが生き残り、人類再生を演じる。バツタと人類。余りにも似ていませんか?】

そして次に文明の暴走と非難されるべきは、「公害」である。水銀による「水俣病」、カドミウムによる「イタイイタイ病」、タバコ・アスベスト・ダイオキシンなど「発がん物質」。その他猛毒を垂れ流した事件など世界各地で何度も見られた。特に米国は、ベトナムで「枯れ葉剤」としてダイオキシンの化学兵器をばら撒いた。そのため、散布地が「先天性異常・流死産など多発。いかに戦争とは言え、原爆と同様、こんなに悪意に満ち

た狂気は断じて許せない。そして更に、エアコンなどに使われたフロンガスは漏れ出て、オゾンホールを作り、強力な紫外線が地上に到達し、皮膚がんや、白内障などを発生させる。

そして私が心配するのは、抗生物質多用による「多剤耐性菌」の出現。人体は、わずか2万5千個弱の遺伝子により生命活動を営んでいるが、ヒトは己の遺伝子だけでは生きられない。乳酸菌など1千種ほどの体内共生菌が持つ330万個ほどの遺伝子の助けがなければヒトは生きられない。

それを、むやみやたらに抗生物質を用いれば、大事な共生菌まで殺してしまう。病院を「梯子」して、抗生物質を多重使用する行為は人類滅亡への引導役だ。

更に商魂たくましいメーカーが仕組む「罨」。それは身の周りが綺麗なことが、いかにも文明進化の象徴であるかのように操作する。界面活性剤や何もかも「抗菌加工」されたもので、身の周りが埋め尽くされたら、人体(勿論、他の動物も同じ)は、箱入り娘みたいに抵抗力のない、ひ弱な生物となり、滅亡の坂道を一気に駆け降りることになる。強毒菌は殺さなければならぬが、常在菌や共生菌は殺してはならない。

さもないものに「アレルギー反応」を起こし、学校給食で、ソバを食べ、児童が死んだりする。数十年前は、スギ花粉症など騒ぐ人はいなかった。現状は見るも無残な季節的国民病である。我々は防衛策として、もつと「汚れた環境に身をさらす」習慣が必要である。無力の赤ちゃんが、何でも手に取り、舐めて抵抗力を養うように。

文明の進んだ国ほど男子の精子造成能力が落ちていくという。雌ばかりが強くなり、「雄はひ弱」

で、男は付属品みたいな家来になり下がるか...。もつとも環境が安定していれば、「雌性生殖」と言い、♀だけで子孫を残せる。霞ヶ浦のゲンゴロウブナは♀ばかりで♂はいない。もし環境が住みにくくなると、♀の中の誰かが代表して♂になり、「有性生殖」を行う。

企業とは、何を考え、人類滅亡への拍車を平気で仕掛けてくるのか。人が、ひ弱になっても、己の会社だけが儲かればそれでよいのか。道義を無視する集団は、海賊・山賊と何ら変わらない。

更に私がやり玉にあげたいのは、「サイバー攻撃」。世の中は、何もかもコンピューター時代。現金の出し入れなしに、カードなどで決済。高速道のETC通過や鉄道のスイカなど、真に便利で、人件費も大幅に節減される事であろう。(そのため職を失う人も多数!)

今年3月には、韓国で銀行のコンピューターが攻撃を受け、現金の出し入れができなくなった。放送局もやられた。韓国は北朝鮮の犯行だと言っている。中国の軍部や政府そのものが、米国の企業や軍事部に介入し、情報を盗み取るうとしていると米政府は怒っている。世界中でこんな現象は、日常茶飯事みたいになっている。

米国は、先進技術やソフトウェアなどの「知的財産」が、中国により年間30兆円以上侵害されていると言っている。発展途上国が、先進国の技術を、盗用してでも、科学技術の獲得を急ぎ、先進国に追いつき追い越せの焦る気持ちは分かるが、真に由々しき問題である。

日本も多額の研究開発費を投じて新技術を開発すると、すぐそれを真似され、世界の市場シェアを奪われる。20年前のソニーの音響技術など、

世界の憧れの的であった。それが今は、会社の存亡に関わるほど、海外の後発メーカーに切迫されている。

「世界が一樣に発展することは望ましいが、常に盗用などがその推進力とは、許せない。文明の暴走である。」

日本でも政府や企業の重要情報が盗み出される事件がしばしば起きている。ハッカーと呼ばれる個人や組織が、他者のコンピュータシステムに介入し、機能をかく乱したり、情報を盗み出した。発信元が分からないよう、第三者のコンピュータを介して侵入するなど、巧妙な犯罪である。そこで当然そのセキュリティが問題となるが、イタチゴッコで、互いに切磋琢磨。

抜きつ抜かれつ、ますますエスカレートするばかり。これが昂じれば、例えば核戦争を防止するためのホットラインを何らかの方法で切断すれば、互いにその意思がなくなるとも、核爆弾発射のボタンが押される事もなくなってしまう。核爆弾による全面戦争は人類滅亡につながる。現在世界中に、全人類を何回も殺しうる原水爆（17200発）を、8か国が貯め込んでいるという。

【人間が考え出したコンピュータという機械は、今や囲碁や将棋など、その世界最高レベルのプロをしのぐ勢いである。私も、7年前の初段クラスの囲碁ソフトには、殆ど負けはしなかった。7目置かせて勝率7割くらい。しかし私は8段の実力など到底ありはしない。機械には何か弱点がある。ソフトが弱くてつまらなかった。

ところが、今年出たアマ四段以上という対局ソフトには、めったに勝てない。定跡はずれの強引な手を打つと、すぐにそれを咎めてくる。人間同

士なら、その場の雰囲気とか、その日のコンディションとか、無理が通れば道理が引つ込む。コンピュータは、感情は一切抜き。論理だけが通用。気合で押しまくる…など全く通じない。

一方将棋ソフトは、今年「将棋電王戦」で、ソフト側がプロ棋士に3勝1敗1分けて勝った。ソフト開発者は金子知適東大准教授（アマ8級？）。679台のパソコンで、1秒間に2億7千万手を読む。プロ棋士の2万4千回の対戦棋譜から学んだものという。電脳が名人を破る時も近いとか…。

一体、人間が創った機械が、人の知能を超えるとは、どう解釈すればよいのか。今、世界は全てコンピュータの時代。人間の決断を機械が覆し、とんでもない方向に走ったら世界は、どうなるのか？…。

更に私など見たこともないが、孫が夢中の「ポーカーロイド」。アニメのアイドルが、歌って踊って、架空の妖精が実在するような錯覚を引き起こしているらしい。テレビの低俗番組など、一億白痴化の推進役だ。社会が乱れる元とならなければ良いが「老翁心」ながら案じられる。電脳の進化は、道を誤れば、社会に重大な混乱を及ぼす。これも文明の暴走だ。】

最後に日本は現在、食糧自給率39%。一体どこに政治がある？ 何かの事情で食糧の輸入がストップしたなら、国民の6割は死ぬほかない。工業製品を売って、食糧を買う？ 正に文明の暴走だ。首都圏に日本人口の4分の1が居住。一極集中は、火山噴火や巨大地震など自然災害・テロ・強力伝染病発生などしたなら、国家は正にイチコロだ。政治・経済・教育・芸術等、なぜ分散しないのか？ 利権がらみの怠慢行政は、滅亡に繋がる。

## ギター文化館

### 2013 CONCERT SERIES

- 7月 7日 井上銘・金澤英明ジャズライブ
- 9月 1日 ロス・トレス・アミーゴス
- 9月 8日 里山と風の声コンサート
- 9月20日 長谷川きよしコンサート
- 10月27日 マリア・エステル・グスマン ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35  
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

人間が発明した非道の兵器を、人間の決断を超えて、機械が操る愚かなストーリーは、想像するだけで、恐ろしくなる。人類の存亡を、無機質な機械に左右されてたまるか。安っぽいSF小説のストーリーが現実のものになる可能性は無きにしも非ず。

30世紀の子孫に、21世紀の祖先は愚かだったと言われないうちにも、常軌を逸した文明の暴走は、今、叡智を絞って、絶対に阻止しなければならぬ。

石岡のおまつりで山車の上に乗る人形についてご紹介しています。今月は守横町の静御前さまです。今年の石岡のおまつりまで、残すところ二か月余りとなりました。町内会の回覧も祭礼の半纏の注文や祭りへの参加者、協力者の募集等々少しずつお祭りの気配が高まっています（私の住む町内はお獅子の参加で六軒東町になります）。

守横町は今年の年番町になっており、町内全域の清掃、青竹に注連縄を張り種々の装飾、仮殿を造る等、祭礼を執行する大役を担っています。

守横町は先月号で紹介しました中町通り（三五五線）を土浦方面に向かつて進みますと金刀比羅神社を右にして間もなく信号のある丁字路を左に入ります。この道路は一方通行になっており、こちらから車は侵入することが出来ません。ほどなくして点滅信号のある十字路に、これを右に曲がると守横稲荷神社が鎮座しています。また点滅信号に戻り、入ってきた道路を真っ直ぐに進みます。徒歩で十分から十五分ぐらいで、六号国道国府四丁目交差点より石岡駅に向かう道路につき当ります。右に曲がり国府四丁目交差点に至る道路をもつ町並です。

現在の町名では、国府二から三丁目、五から六丁目になっています。戸数は一五〇軒、比較的大きな町になっています。

石岡の地名（石岡市教育委員会発行）によりますと、正保年間（一六四四〜四八）に馬之地上町を守横町に改名。由来は守木横町の略という。とあります。

守横稲荷神社近くで庭園造りの職人さんが入っていました本多様ご夫妻にお話を聞くことが出

来ました。ご主人様がおっしゃるに守木町の横にあるから守横町になったとも言われているのとこと。おまつりには隣に御仮殿が設けられるので是非おいでなさいと楽しい話して下さいました。人形に関しては鈴機鉄工所さんに尋ねて見て下さいとの事でした。

おまつりには素敵に完成した庭園を拝見することも楽しみに、お伺いすることを約束して後にしました。

鈴機鉄工所の会長様には心良く引き受けて下さり腰痛を押しての資料集めをして頂きました。誠に有りがとうございました。それに、区長さんの櫻井様（石岡のおまつり振興協議会の会長さんも兼）をご紹介頂き、櫻井様にもお話を伺う事ができました。それでは鈴機鉄工所さまからの資料を原文のままご紹介します。

島田徳太郎様の話の続き  
元老も明治二十年以前は定かでは無かった。当時稲荷神社の通りが町並で本町と稱しており、野鍛冶を中心とした職人の町でした。それ対し現在の守横通りを新道と稱し、桑畑等大部分が畑であった。

明治三十五年八月二十九日、役場で年番改正があったが、その前の二十二年守木町と合同で年番を受けている。守横の山車は大正十一年に完成、大正十二年の年番に初めて出した。町内の大工、野鍛冶、材木屋等が二年掛かりで仕事の合間の協同奉仕の製作だそうです。

#### 人形の変転

- 一、大正十一年刃物鍛冶の鍛造の姿
- 二、大正十二年（年番）浦島太郎新調

昭和四年大火で象鼻と共に焼失

三、昭和四年〜七年酒樽

四、昭和八年〜四十三年 神武天皇

五、昭和四十四年年番に見え静御前新調

六、平成八年年番に見え大修理

七、平成五年守横山車獅子建造有志委員会設立、

山車、獅子、山車小屋 幌 平成五年八月新

調 完成 同月二十二日完成祝

八、平成十年、年番町となる

資料はここで終わります。ここからは櫻井様から伺ったことを追記します。

人形の変転の中の七、平成五年には人形源為朝の新調もあつたそうです。ところが平成七年に山車とともに為朝さまも火災に遭い焼失。そして傷がついて、表舞台から去っていた静御前さまが美しく手直しされ平成十年年番の年に再登場となり平成二十二年には百万円をかけての衣装等の修復があり現在に至っているそうです。

ここでもう一枚の鈴機鉄工所様からの資料の中の静御前さま購入のエピソードをご紹介します。

昭和四十四年四月年番の役員会において、人形神武天皇の老朽化により、新調したいとの発言があり、役員九名の賛同により、車二台に分乗し、埼玉県本庄市の米福人形店に向かいましたところ、静御前さまが展示してあつたそうです。購入したい旨、言ったところ桐生の某町内の註文品で売れないとの事、更に人形は総て受註製造で受註後、半年以上かかり着付けと搬送を含めると七か月かかるとの事で、九月の祭礼には間に合わないとのこと、ねばりにねばって、桐生のお祭りが十二月と知り、桐生の分は今から造っても間に合うのではないかと四〜五時間ねばって商談成立したそうです。

ここから原文のままご紹介いたします。

「それ程、役員全員気に入った人形です。今迄、変転を重ねた守横の人形を悲運の女性 静御前としたのは男女同権を唱え、

静や静 静のおだまき繰返し

昔を今になすよしもがな

と誤解のもと源頼朝に追われた義経を慕って替歌で頼朝の前で舞う静御前の夫婦愛はうるわしく現代にも通じるどうしても守横のシンボルとして欲しかったとの委員長発言」

こんなにも役員さんの深い思いと意気の入った静御前さまだったことを守横町の皆さんはご存知だったのでしょうか。何体かの変転の中、再登場した静御前さま、義経さまと一緒に守横町の皆さんをお守りしていることでしょう。

資料提供やお話しをして下さった本多様、鈴機鉄工所様 櫻井様有り難うございました。

最後になりましたが当会報ふるさと風先月号の中町の日本武尊さまの文中、鬼澤様の名前を誤って萩原様としてしまいました。お詫びを申し上げ訂正させて頂きます。

・もこもこみどり蝸牛どこへ行く 智恵子

## 茨城の妖怪(2)

小林幸枝

今月は、三代にわたる怨念の物語「累(るい・かさね)」についてお話ししましょう。真夏の暑気払いの話としては「四谷怪談」と「累(かさね)ヶ淵」が双璧と言われるほど有名すぎる物語です。

累ヶ淵は、茨城県常総市羽生町の法蔵寺裏手辺りの鬼怒川沿岸の地名で、江戸時代にこの地を舞台とした「累(るい)」という女の怨霊とその除霊を巡る物語として広く流布したものです

累の物語が最初に紹介されたのは、元禄時代に出版された仮名草子本「死霊解脱物語聞書」であると言われています。

江戸時代の初めころ、下総国羽生村(現在の水海道市)に、百姓の与右衛門とお杉という夫婦がいた。お杉には連れ子の娘「助」がいた。助は生まれつき顔が醜く、しかも足も悪かった。与右衛門は助を嫌っており、邪魔に思っていた。ある時与右衛門は助を川に投げ捨てて殺してしまった。その翌年、与右衛門とお杉には女の子が授かった。二人は娘に「累」と名付けたが、累は助そっくりに醜い顔であった。それで村人たちは、累が助に生き写しである事から、助の祟りと噂して「助がかさねて生まれきた」と言って「るい」ではなくて「かさね」と呼んだ。

両親が相次いで亡くなり、一人になった累は、病気で苦しんでいた流れ者の谷五郎を看病し、やがて与右衛門二代目として婿を迎えたのであった。しかし、谷五郎こと二代目は醜い累を疎ましく思うようになり、累を殺して新しい女と一緒にいる事を企み、谷五郎は家路を急ぐ累の背後から迫り、川に突き落として殺害したのであった。

その後、谷五郎は幾人もの妻を娶ったのであったが皆、早くに亡くなってしまうのだった。その人の妻「きよ」を迎えたとき漸く谷五郎の子が生れた。名を菊と付け可愛がったが、ある時菊に累の怨霊が取りつき、菊の口を借りて谷五郎の非道を語り、供養を求めて菊の身体を苦しめた。

弘経寺遊獄庵に滞在していた祐天上人がこの事を聞き、累の解脱をするが、再び菊に何者かがとり憑いた。祐天上人が再び問いただと、それは助という子供の霊であった。古老の話から累と助の経緯が明らかになり、上人は助にも十念を授け戒名を与え解脱させ事を収めたのだという。

法蔵寺には、累の墓があり、常総市の指定文化財になっており、また法蔵寺には祐天上人が解脱に用いた数珠、累曼荼羅なども保存されているそうです。

## 塔のある風景

木村進

先日、東京から来ている母を連れて桜川市の雨引観音(薬法寺)に出かけた。ここは安産・子育てに御利益があるというので、何度か訪れているが梅雨時に来たのは初めてだった。

紫陽花が有名でテレビなどでも紹介されており、ある程度の人出は覚悟していたが、平日のためか混雑と言う程ではなかった。入口の「雨引山薬法寺」と書かれた石の看板の周りから紫陽花の花は本堂の方まで一杯に咲いており、いろいろな色が混ざり合っとてもきれいであった。

寺の記述によれば6世紀末(587年)に梁の国人の法輪独守居士により開かれ、光明皇后が安産祈願したといわれ、近年では皇后美智子妃の皇太子の誕生の際に安産祈願のお守りを皇居にて御奉呈をしたとされており安産・子育て祈願の霊場としてその名が知られている。また、古くは紀伊国屋文左衛門が松の木を植えて商売繁盛を祈願し江

戸一番の豪商になったという言い伝えなどが残されておりこの近辺では有名な寺である。

入口の室町時代に建てられたという薬医門をくぐると長い石段が続くが、この両脇を始め、途中にある鐘楼堂の周りも全て色とりどりの紫陽花で一杯です。そして階段の途中にそびえる仁王門（薬門）は見事な彫刻が施され、日光東照宮を思い出させる雰囲気があります。

そして、階段を登ったところの正面に本堂とその左手に立派な多宝塔があります。

この雨引観音の歴史的な建造物を少し理解するために調べてみると、鎌倉時代の建長6年（1254）後嵯峨天皇の皇子宗尊親王により三重塔・仁王門・鐘楼堂・客殿・不動堂が建立されたとありますが、これが戦国末期の兵火で皆焼失してしまいましたが、これが戦国末期の兵火で皆焼失してしまいが入口の仁王門は1628年に再建され、鐘楼堂も江戸時代に再建されました。また本堂は宝永7年（1710）に建立されたものです。

さて、今回参拝した時もこの寺のシンボルである多宝塔の前に立ち、そつとその姿を見上げました。そして何故これが三重塔ではなく二重塔のような多宝塔なのだろうかと考えておりました。

この塔は三重塔と言ってもよい実に大きな迫力を持った立派な塔です。この多宝塔がある位置には鎌倉時代に三重塔が建てられていました。これが兵火で焼失し、この三重塔の再建がこの寺の悲願でなかったのかと感じざるを得ないので。調べてみると「天和3年（1683）十四世堯長が、三重塔を再建しようとして良材を集めて塔の第二重目まで建設したが、病のため果たせず、十五世堯宗は先師の遺命を奉じて翌貞享元年正月、工事を進めて円成（仏の心を成就すること）し、嘉永6年（1

853）元盛暢光両師協力して十万人講を勧進して、三重塔を改め多宝塔としたのが現在の塔です。」

（雨引観音のサイトホームページ）という説明がありました。このような山の上ですから工事をするにしてもかなり大変で当時の人びとの信仰の深さなどがうかがえるのです。この寺でもう一つ有名な祭りである「マダラ鬼神祭」についてもここが兵火で焼けおちた後に謎の覆面の職人たちが集まって仮本堂が17日間で完成し、この職人たちが指揮していたのが鬼の面をかぶった白馬にまたがった鬼神であったことから、この祭りが始まったといわれています。この摩多羅神が何故この雨引山に出現するのかとても興味のあるテーマなのですが、もう少し調べたら面白いこともわかるかもしれません。今回はこの多宝塔を含め、ほぼ南北に立派な三重塔がほぼ一直線に並んでいる事を紹介しましょう。

雨引山の約6kmほど北に「富谷観音（小山寺）」があります。あまり知られていないようですが、この三重塔は実に見事です。このような和様の三重塔は、関東以北で建てられた最古のものだそう

です。やはり富谷山という山の上の方に建てられており、とても眺めの良いところです。この富谷観音小山寺も天平七年（735）聖武天皇の勅願により行基菩薩が開山したと伝えられる古刹で、三重塔も室町時代の寛正六年（1465）に下妻城主多賀谷朝経が再建したと伝えら、一時国宝と指定されていましたが現在は国の重要文化財です。

もう一つは雨引山の約10km南にある「椎尾薬師（薬王院）」の三重塔です。ここも椎尾山の中腹にあり眺めの良いところに建っています。昔はこの

ような山の上に物資を運ぶのも大変苦労したのではないかと推察されます。この塔は江戸時代宝永元年（1704）完成で、雨引観音の多宝塔と同じく県指定の文化財となっています。

何故このように立派な塔が筑波山から加波山山系の西側の山中に建てられているのかとても不思議な気がしています。

雨引観音（薬法寺）の本尊は延命観世音菩薩（国指定重要文化財）であり、富谷観音（小山寺）の本尊は行基作とも伝えられる木彫りの十一面観世音です。また椎尾薬師（薬王院）の本尊は薬師瑠璃光如来像で、鎌倉時代の作と伝えられ県指定の文化財です。

その他の多宝塔や三重塔を調べると、やはりこの三つの塔のほぼ真南に板橋不動尊（願成寺）（つくばみらい市）の三重塔があります。今まで紹介した塔とは違って平地に建てられたものです。また椎尾薬師からは南に25km程離れていますので、同列で考えることもできないかもしれません。わかりやすいように茨城県と一部栃木県の塔を一覧表にしてみました。

- 1、椎尾薬師（三重塔）…1704年（江戸時代）
- 2、雨引観音（多宝塔）…1684年（江戸時代）
- 3、富谷観音（三重塔）…1465年（室町時代）
- 4、板橋不動尊（つくばみらい市）（三重塔）…1772年（江戸時代）
- 5、西明寺（益子）（三重塔）…1539年（室町時代、戦



国時代

18. 2 m 国の重要文化財

(注：滋賀県にある同名の西明寺の三重塔は鎌倉時代の作で

国宝)

6、来迎院(竜ヶ崎)・多宝塔…1556年(室町時代、

戦国時代)

13. 1 m 県の重要文化財

この板橋不動尊は高幡不動・成田山新勝寺と入  
れて関東三大不動ともいわれるお不動さんで、江  
戸時代に水戸街道の牛久沼を避けたルートである  
「布施街道」が布施弁天とこの板橋不動尊を通る  
ため栄えたようです。三大不動などと言うのも三  
大祭りなどと同じように何処と決まったものでは  
なく、規模や歴史、その地を愛する人の多さなど  
により多くの人から認知されていくものなのでし  
ょう。

竜ヶ崎市駒馬町にある来迎院は、関東地方では  
最古の多宝塔といわれ、布施街道を考えるとこの  
板橋不動尊とどこかでつながっているようにも見  
えます。

もともと三重塔、五重塔、七重塔などは仏教を  
広めるためにインドで仏舍利として広まったもの  
がこのような形で伝わって来たものでしょう。常  
陸国の国府石岡にも国分寺や茨城廃寺の七重塔が  
聳え立っていたはずです。

一度これらの塔をめぐって昔からの風を感じて  
みるのもきっと面白いと思います。

## 四つの門

伊東弓子

あと二、三日すると今年も半分が過ぎていきま  
す。私にとつてのこの半年間というものは、人生  
の中で一番辛い日々を送ったといえます。

日常生活の中で簡単に「四苦八苦」という言葉  
を使ってきましたが、これは正に人間の生きてい  
く姿其の物だろうと思ひ知らされました。今、正  
に人生の坂を下っている私にとつて「生老病死」  
の四つの苦は強く身に迫ってくるものがあります。  
四つの苦を「四つの門」という話しの中でシッ  
タルダ王子の苦悩の日々について、今は亡きあな  
た(夫)と考え合つた事を思い出します。

東の門、西の門、南の門、北の門から町にでた  
王子の眼に、老人の姿、横たわる病人、葬式の列、  
そして一人の僧の目の輝きの美しさ等、城の中で  
豊かな生活をしてきた王子にとつて、その驚きは  
やがて苦悩と変わっていきます。

幼い子供達と「人間はどうして年をとるのだろ  
う」「人間はどうして病気になるのだろう」「人間  
はどうして死ぬのだろう」「人間は一生懸命生きま  
しょう」と唱えてみた。自分に聞かせ、子供達の  
心に響くことを願って毎年七月になると唱えてき  
た。まだ若く、張り切っていた頃のことです。  
やがて現役を離れ、生活形態が変わつた事は大  
きな衝撃でした。あなた(夫)もそうでした。何  
でも構わないという訳にはいかな様子ひしひ  
しと感じました。自分が納得出来る事を行いたか  
つたのでしよう。ボランテアで古墳の草刈りは  
長くかかったけれど楽しんでいました。本を読む  
事も大好きでしたが、それ以上に発掘の仕事は生  
甲斐になっていました。

十年位夢のある仕事が続きましたが、暑かった  
夏のある発掘の後、体調を崩し、年令の事も気に  
し辞める事になってからが辛い毎日となりました。  
これは、老いと共に心や体が伴っていない悲し  
さの現われでもあり、諦めていく苦しさでもあり  
ました。

そんな時二人でテレビを見たり、私の仕事を手  
伝って貰ったり、他愛ない話をする事も多くなり  
ました。そんな穏やかな日々が亀裂が入つてしま  
つたのでした。体が不自由になったのです。

始めの頃は押し車での散歩も「こんな姿で人に  
合いたくない」と言っていた。やがて友の所、床  
屋へと行ける気持ちになりました。デイサービス  
も早々と支度をし、一人で乗れるからと手を振り  
払って出かけて行きました。折り紙の作品も自分  
で作ったんじゃないと、投げていたのに、手渡し  
てくれる様になり、書は字が下手だから書かない  
と言っていたものが、遠く韓国で生まれた子の名  
「東要(とんよう)」を書いた事から「元氣」「心」「あ  
りがとう」「やさしさ」など次々に部屋を飾りまし  
た。焼物も形が歪んで傾いてしまうと嘆いていた  
のにコップ、皿、花瓶等を作ってきました。

あんなに好きだったカラオケも声が出ないから  
歌わないと言っていました。軍歌の歌詞をコピー  
して歌って来た。大きな声が出たと喜ぶようにな  
りました。石岡に出かけた時は必ずデイサービ  
スのルームに寄って、喫茶ルームでここにこして  
いるあなたと一緒にお茶を飲みました。知ってい  
る人に合つた事、話しをした事等を語ってくれる  
様子から今の生活を楽しんでる様子が分かりま  
した。

歯車が少しずつ食い合わないのを感じるように

なりました。十二月の寒さが加わった所為か何かが体を蝕んでいたのでしょう。様子が変わってきました。あの時あなたは何を感じていましたか。病んでいる体を車椅子で受けつけに行つたのは十二時五分。若い受けつけの娘さんが「十二時までが午前中の受付です。五分遅れているので午後に来てください」と言うのです。私は必死で頼んだのです。「今度から気をつけてください」と意地悪に言われても、病んでいる立場の本人、家族はこういう言動に耐えねばならないのかと悲しい限りでした。

あなたはどんな思いだったのでしょうか。あちこち検査に回り、冬の陽も落ちた頃、漸く話が聴けました。「検査に長い時間かかりお疲れ様でした」と声をかけてくれました。あなたは「そうですね」と弱々しい声で答えてました。お医者さんは傍にいた看護師さんに「こんな重病の患者さんを長い時間待たせたり、長い時間かけて検査をした事は拙いね。受付に時点でもっと早く対処の仕方があった筈だ。また、待合室を見回る体制も必要だね。全体に報告しておくように」という言葉に救われた。昼に受付で受けた不快さから、今から世話になる病院への不信を感じながら、それと同時に二人で生活していたのにもっと早く気が付けばと悔やまれた。そんな長い長い一日が暮れました。二度と元気になって帰る日はない病院生活が始まった。翌日部屋が変わり手が縛ったままよく眠っていたので聞くと「仕様がないう。夕べ暴れたから同じ部屋の人に嫌がられて部屋替えしたのよ」という事だった。家族にこんな言い方であるのかと不信に思った。夕べ何故付き添ってやらなかったか。「私がついてみてます」と言わなかったか

と悔やまれた。不安の中で「婦長さんはいらっしゃいますか」と聞くと「ふちようないませんよ」と分らない様子だった。

「毎日担当がいて連絡とり合っていますから」と冷たい返事だった。昔と今の病院内の違いもあるのだろうが、誰かに縋りたい気持ちも、甘えもいけないのだろうか。お任せしたという事は、下手に下手に言う事を聞いていただけなのだろうか。怒りにも似たものが胸の中を走っていく。

一週間の前半は来てくれた人と握手をしたり、言葉を交わしていた。娘と息子二人私の四人で交代に付き添った。家で看病するのならどうだったのだろうか。もっと苦しかったのだろうか。遠く離れている娘二人の名前を呼んで「来るのか。会いたいな」と何度も聞いていた。孫が絵本を読んでくれたのを喜んでいた。笑って有難うをしていた。

中半頃からベッドの横の棧に掴まって息を吸っていた。最後の力を振り絞って息を吸っていたのでしょう。痛みはあったのだろうか。言葉も少なくなってきた。

身内が大勢見守る中で静かに逝った。弟が「親父の月冥日に兄貴は逝った」という言葉が耳に入って、すすり泣く声が聞えて来た。

あなたの顔は安らかでした。表情豊かに言葉を話し歩いてきた人が一週間後、すべての活動を止めてそこに横たわっていた。

一週間以前は、苦しかったのだろうか。服を脱ぎ着し、食事をし、用便もすべて済ませ、バスに乗って一日皆さんとの生活を楽しんで、そして帰ってきました。最後まで自分の力で生活し、最後に現代医学のお世話を少し受けて旅立って行った。

あなたらしい最後でした。

葬儀が済んで一週間後壁飾りの作品の焼物が届いた。『花のいろはうつりにけりないたずらにわがみ世にふるながめさしまに』と大好きな百人一首が添えられていた。自信作だったのだろう。

これからどう「生きていくか」が自身の課題ではあるが、毎晩、明日目を覚ますことを願って床についている。私の傍に存在する四つの門を意識して、あなたが四つの苦を越えて行つたように私も越えていこう。

## 【特別企画】

### 虚構と真実の谷間

打田昇三

#### 第五章 怪しげな対決（4）

平家物語・巻一の「殿上闇討」には、平忠盛が鳥羽上皇の為に京都市左京区に得長寿院という寺を造進し三十三間堂を建てて千一体の仏像を据えた―その供養が行われたのが天承元年（一一三二）

三月十三日：とあるが、その時の天皇は保元の乱の中心人物のような崇徳天皇である。その二十日ほど前には天皇の御座所に置かれていた「神劍」が何故か紛失している。後に平家が壇ノ浦に滅びた際に安徳天皇と共に神劍は海に沈んだ、と言われているけれども、実は五十五年以上も前に無くなっていたのであるから、平家の皆さんも剣のことは気にする必要が無い。平忠盛は丁度一年後の長承元年三月十三日に昇殿を許されている。先に述べたように番犬程度にしか見られていな

かった平氏が公家の仲間に入ったというので、我慢が出来ない連中が怨霊の活躍する闇の世界を利用して平忠盛を暗殺しようとする。平家物語には「：雲の上人は是を猜み、同き年の（くものうえびと、これをそねみ、おなじきとしの）十二月二十三日、五節豊明の節会の夜、（：こせちとよのあかりのせちえのよ）忠盛を闇討せむとぞ擬せられける：」とある。新参者排除は野獣の世界などにあるようだが、日本の最高権威である宮殿で闇討ちが堂々と計画されるといふのは凄い！「五節豊明の節会」そのものが、十一月に行われる新嘗祭（いなめさい）の宴会であり、無礼講のような宴会であつたらしいから、宮中そのものが闇に蠢く（うごめく）怨霊の世界になつてた。藤原政権が腐り切つていた証拠であり、武士の時代が到来する予兆を感じる出来事である。当時、崇徳天皇は中学生ぐらいであるから全く無視されている。

その崇徳天皇であるが、百人一首に「瀬をはやみ岩にせかるる瀧川のわれてもすゑに逢はむとぞ思う」の作が採られている歌人であり「筑波峰の：」の陽成天皇と同じく才能が高く評価されているのである：にも拘らず、と言うか、同じ様に、と言うか此の天皇も通常の人生が送れなかつた。

「崇徳天皇（上皇）」というお名前は、一般に知れ渡っているようで良く分からない：のだが、石岡では守木町の金刀比羅宮に参詣すれば、祭神であるから運が良ければお目にかかれる？：金刀比羅宮の本宮（讃岐）に神として祀られたからである。

鳥羽天皇の第一皇子で、顕仁（あきひと）親王が諱（いみな）である。五歳にして鳥羽天皇から譲位され、保安四年（一一三三）二月に即位したのだが、二十三歳の冬には異母弟の近衛天皇に譲位させら

れた。近衛天皇は未だ三歳であつたから「僕が天皇になる！」などと言う訳が無いので、これは鳥羽上皇が「江戸の仇を長崎で討つた」ことになる。つまり自分が父親の白河法皇に言われて崇徳天皇に譲位させられた仕返しをした。

ややこしいから人間関係を整理してみると：

白河天皇―堀河天皇―鳥羽天皇―崇徳天皇

近衛天皇

後白河天皇

という親子関係にはなるのだが、実は崇徳天皇が鳥羽天皇の子では無く、白河天皇のDNAを直に受け継いでいる：とする説が強いのである。それと言うのも母親の待賢門院（たいけんもんいん）こと藤原の璋子（しょうし）さんが、鳥羽天皇の中宮（皇后）になる前に、白河上皇の準養女となつていた：平清盛を生んだと言われるのは祇園女御の妹らしいが、祇園女御は超美人の白拍子（一般的には歌舞を舞う遊女）とされ姉が超美人だから妹も：という原理で一緒にいたらしい。ともかく祇園女御の周り、と言うより、白河上皇の許には美少女が集められており（女学校でも経営していたのか？）藤原璋子は祇園女御の許で育てられたと言われる。璋子が年頃になつたので白河上皇は自ら手配して藤原忠通という公家に嫁がせようとして断られた―と伝えられるから、何か勘ぐられることがあつたのかも知れない。結局、藤原璋子は平清盛の生まれる前の年に鳥羽天皇の後宮に入り（正しくは白河上皇が押し込み）女御から中宮になつた。恐れ多くて「嘘」とは言えないが、白河上皇は、かなり謎のある人物らしかつた。

藤原璋子は先に紹介した「花山法皇が熱を上げた姉妹の父親（藤原為光の後裔）」である。この系

統は蠱惑的（こわくてきな）女性の血筋なのか父親の白河上皇に妖女を娶らされた鳥羽天皇は、その女性が生んだ崇徳天皇を自分の子とは認めなかつた。その上、天皇となつても上には上皇がいたし、成人式が済んで、やっと自分らしい政治をしようと決心した途端に退位させられたから白河上皇Ⅱ崇徳天皇ラインが憎くてしょうがない。

大治四年（一一二九）七月七日、四十数年の院政を続けてきた白河法皇が七十七歳で病死した。七夕の日に七十七歳で大往生したり、仏教に帰依して各地に寺を建てたりしたらしいが、怪しい行動が隠しきれず「人生の嘘」は仏様に見抜かれた。「人間らしい天皇であつた：」などと褒めている史書もあるが、お世辞か嘘であり、怪しいオジサンであつたことは公共放送のドラマでも示した。

崇徳天皇は強力な後盾を失つたことになるが、鳥羽上皇は直ちに院政を布いて少年天皇を抑えたから崇徳天皇も当面は地位が安泰であつた。当時、鳥羽上皇に皇位を継ぐような子供が居なかつたことも崇徳天皇の在位を許したのである。鳥羽上皇は平家を上手く使つて、その頃に西の海で暴れていた海賊やら、比叡山・興福寺などで暴れようとしていた僧兵の対策に向けた。平忠盛らの平氏一門は伊勢国に領地を広げる一方で海賊退治に成果を挙げた。その戦利品などが鳥羽上皇の許に献上されたから平家物語にあるように鳥羽上皇は平忠盛を抜擢したのである。

一方の源氏は、摂津国（大阪）から出て平忠常の乱が収まった後に平直方から孫の八幡太郎義家に譲られた鎌倉を本拠と定めたから、関東の地盤擴張に専念して都での営業開始が平家より少し遅れた。都に近い伊勢を地盤とした平氏と、遠方

の鎌倉を地盤としていた源氏とではセールスマンの成績が違ってくる。此の差が、保元の乱から平治の乱にかけて、平氏が興隆し源氏が没落する原因になったと勝手に思っている。保延五年（一二三九）に奈良の僧兵たちが喧嘩を始めたので平忠盛は鳥羽上皇の命令で是を鎮圧した。

その年の五月に、鳥羽上皇の側室である得子（美福門院）が皇子を生んだ。この女性は年齢が若く美人として知られていた。但し、父親が藤原長実という庶流の中納言であったから側室としての得子の地位は低かった。體仁（なりひと）親王と名付けられた皇子は生まれて数か月後に「皇太弟」に指定された。崇徳天皇の弟という形である。

體仁親王が三歳になった永治元年（一一四一）三月に美福門院藤原得子が准三宮（じゅんさんぐう）の宣旨を受けた。これは太皇太后、皇太后、皇后の三宮に準じて封祿や叙爵が行われるということで、簡単に言えば、皇族では無い者を皇后に準じて遇することである。「これはヤバイ！」と思った崇徳天皇の予感は当たり、暮れになると鳥羽法皇から「體仁親王に皇位を譲るように……言われた。『嘘っ！』と叫んでもどうにもならず、十二月二十七日、宮中の大掃除の最中に即位した體仁親王は、第七十六代の近衛天皇となり式典が済んでから乳母と一緒に保育園に行った。

崇徳天皇は崇徳上皇となり、鳥羽上皇は仏門に入って法皇を称した。白川院政時代のように一天皇・二上（法皇）という、ややこしい権威の乱立が続くことになる。未だ元氣なのに三歳児により皇位を下ろされた崇徳上皇は、何となく面白くない日々を送ったが、鳥羽法皇は幼い天皇を見守りながら満足した毎日であった。しかし時代としては

平和という訳にはいかず、かつて、白河上皇が「思うようにならない」と嘆いた三つのうち比叡山やら奈良・興福寺などに巢食っている僧兵たちが難癖をつけては神輿を繰り出し、神様の威光で無理な注文を通させようとする。仏教が分離される明治維新までは、神社が寺院に吸収されているような状態であったから寺院の威張ること、手が付けられない。

加えて当時の政権を担当していた藤原忠通と頼長の兄弟（評判の悪い道長の子孫）が反目していて権力争いが仕事になっている。碌な政治が出来ないところに京都の大火事があり、源氏・平家の武士団は僧兵の鎮圧に繰り出されても適当な合戦は出来ないから、つい本気の戦争をしてしまう。すると「やり過ぎ」の責任を取らされる。これでは鎮圧の意味が無く武士の間にはストレスが溜まり爆発せずには収まらない時代になる。その頃、平清盛は父の死により平氏の頭領となり、源頼朝は源氏の嫡男として生まれた。

久寿二年（一一五五）の七月、近衛天皇が十七歳になった夏に体調を崩した。記録では「眼病」となっているが、目が悪くて命に関わるものがあるのだから……この頃の治療は医師の看護と坊さんの御祈禱が半々ぐらいらしいから、喧しい祈禱は病気を進めるし、目が悪いのに護摩焚きの煙が良い筈がなく、天皇はたちまち命を落とされた。皇位の継承者が問題になるのだが、十七歳の天皇に子は無い。先帝の崇徳上皇には十四歳になる重仁（しげひと）親王が居たから、通常ならば此の少年の名が挙げられる筈で、周囲もそのように予測していた。ところが……

既に述べたように鳥羽法皇は崇徳上皇が嫌いで

あるから心中には「排除」の文字しか浮かばないし、一方、崇徳上皇のほうも息子の即位と並列で自分がもう一度、皇位に復帰しても良いぐらいに思っている。君主は国家の要なのだが、これはもう「権力の奪い合い」に成り下がっている。

近衛天皇の葬儀もそっちのけで密議が交わされた結果、誰もが全く予想しなかった天皇人事が発表され、それを知った人々は思わず「嘘！」と叫んだのである。密議に加わったのは鳥羽法皇と、美福門院（近衛天皇生母）、そして関白の藤原忠通らであり、藤原頼長や崇徳上皇らは除外された。

「柵から牡丹餅」どころか「天井から米俵」ぐらいい好運が転がり込んで来て、思いも掛けず第七十七代天皇に指名されたのは、後に源頼朝には怪物扱いをされた後白河天皇である。後白河天皇は鳥羽上皇（当時）の第四皇子として生まれ、母親は崇徳上皇と同じく待賢門院（藤原璋子）とされるのだが、なぜか「誤白河」と書きたいほど最初から皇位継承には無縁の存在であつたらしく、日本外史などは「（後白河天皇の即位に）朝野駭然（ちやうやがいぜん）日本中が驚く……」たり」と書いているので、正に意外な人事だつたらしい。

後白河天皇は、兄の崇徳上皇より八歳下で当時二十八歳になっていた。父親の鳥羽上皇も自分の子ながら、皇位継承者としては全く眼中になかったようであるが、密議の席で美福門院から言われ、初めて気が付いたらしい……なぜ、そういう人が候補になったのか……表向きは「第一候補の重仁親王が自分のところへ余り寄り付かない……」と美福門院が文句を言ったことになっているが犬や猫を選ぶのとは違うからそういう理由では無い。もし重仁親王が即位すれば鳥羽上皇が嫌いな崇徳

上皇が後見することになる。それを阻止するためであることは、当時の小学生でも知っていた。

もう一つの説というか、台記(たいぎ)と言う藤原頼長の日記に書かれているらしいのは、誰が言い触らしたのか、近衛天皇の死は頼長が呪咀をしたから…とする噂を鳥羽法皇が信じて、崇徳上皇とセツトで排除したとする。これは多分、敵側の謀略であろう。いずれにしても勝ち組と負け組とがハッキリした。当然中の当然として崇徳上皇は激怒し、かつ失望・落胆したけれども父帝が決めただことであるから、どうすることも出来ない。また一方で重要な会議に参加出来ないと言うか、完全に干された大臣の藤原頼長も、嘘話を含めて此処で憤慨しなければ怒る場所が無い。この二人が接近することは自然である。

後白河天皇の即位と同時に、第一皇子である守仁親王が皇太子(のちの二条天皇)に挙げられたから崇徳上皇の希望は百%絶たれたことになる。

奇策をもって崇徳上皇を抑えた鳥羽法皇は大満足で、その年の冬に平素から信仰する熊野神宮へ参詣に出かけた：勿論のこと自分の望みが叶ったお札の心算(つもり)なのであるが：泣かせた相手がいるから熊野の神様も迷っておられた。或いは崇徳上皇が先手を打って神様に訴えていたのかも知れないが、熊野本宮でお祈りをしていた時に急に眠くなつた。夢か現(うつ)か、社殿の中から童子の手だけが出てきて、掌(てのひら)を何度も裏返しにしてから、すつと消えていった。

さすがに気になったので側近の者や参詣の先達(案内人)らを呼び、夢解きのために腕の良い巫女(みこ)さんを連行させてきた。巫女も相手が法皇であるから、本当のことを言うと言せられるし、

嘘をつくとも神様に叱られる。困っているから何時になつても神様が乗り移らない。法皇も御機嫌が悪い。熊野神宮側も営業に差し支えるので大勢の山伏を集めて来て適当なお経を合唱させた。巫女も観念して法王の夢を再現し、童子が掌を返した意味を解説した。

それによると「来年の秋頃に、誠においたわしいことながら、法皇様がお隠れになり、その為世の中が乱れます」と言う。一同が驚き、どのようにすればご寿命が延びるか?を尋ねたのだが巫女に取り付いた神霊は、教範に書いてある通りに「：前世から決まっている寿命は変えることが出来ない」と答え、巫女は死んだ振りをした。熊野での御托宣でショックを受けた鳥羽法皇は、北面の武士を増強して院の警備を固めたのだが、精神的なダメージは大きく保元二年(一一五六)七月二日に予定通り崩御された。平清盛など主な武士たちは、何事が起きても法皇を護る…と言う起請文(誓約書)を書かされたらしい。

鳥羽法皇の死を知った崇徳上皇は、心の中はどうでも義理として弔問に訪れたのだが、法皇の側近たちは崇徳上皇が呪ったと思っているから門前払いをしたようで、この辺が子供の喧嘩であり、日本国の頂点に君臨する者の所業ではない。崇徳上皇のほうでも藤原頼長と図って政権の奪回を目論み、両派が武士団を集め始めた。法皇の死後、八日目のことである。世に言う「保元の乱」はこうして起こった―とは言っても、内容はごくつまらないもので、七月十日に崇徳上皇と藤原頼長が味方になる武士団を集めさせた。

崇徳上皇方に付いたのは平清盛の叔父さんになる平忠正、源頼朝の祖父・源為義と、其の子の為

朝と何人かの兄弟、それに仰々しい官職を重ねた藤原一族と思える中級官僚(武士)二十数名と、その家臣たち合計一千余騎である。これらが十日にただ集まっただけである。

一方の後白河天皇を護る側は、源義朝、義康、頼政などの源氏武士団、平清盛が率いる平家武士団、それに宮殿の諸門を護る役人など合戦のプロが千七百騎余りであるから、最初から勝負は決まっていた。この軍勢が崇徳上皇の居た白河殿に十一日の夜明けに奇襲攻撃をかけた。豪弓の為朝が良く防いだけれども、攻撃されたほうが完敗して主な武士たちは斬られ、首謀者の頼長は戦傷死、崇徳上皇は讃岐国に流されたのである。此の時に勝者側の公家は、降伏して来た武士を、その身内の者に斬らせた。源義朝は父の為義と何人かの弟を斬ることに成り、平清盛は叔父一人で済んだ。こういう残酷なことは公家の発案である。

源為義は崇徳上皇から味方に付くように言われたけれども、高齢を理由に御断りをしたらしい。しかし上皇から何度も頼まれ、止むを得ず引き受けたようなので気の毒と言う他は無い。当時は死刑が廃止になっていたのに「保元の乱」で崇徳上皇に味方した武士の多くが斬られた。勝つたほうが国会審議もせずに死刑を復活させたのである。

戦争を言い出した崇徳上皇は、本拠地の白河殿(賀茂川上流・大文字山麓)が焼かれたので仁和寺(今なじ川右京区御室・宇多天皇創建)に避難していた。本来ならばA級戦犯であるから血眼で探索される人物なのだが、先んずく天皇が逃げる心配も無いであろうと、敵も遠慮しているから「おいらは無関係」のような顔をして仁和寺に来た。

其の俣、この寺で過ごすのも悪くないと思ってい

たところ七月二十三日に後白河天皇の使いが来て「貴方はナンバーワンの戦犯である」と、良く説明してから讃岐国(香川県)へ流される(丁寧と言うと遷し奉る)ことが宣告された。

余程、気の利く役人が居たようで、その日のうちに囚人移送用の牛車が準備され武装した供の者(実は監視員)が来て崇徳上皇は讃岐国へ連行されたのである。都を離れたのは夜更けとなった。

四国まで、どの様な経路で行かされたのか明確ではないが保元物語などに「草津にて御船に乗せ奉る」とあるので、宇治川から淀川経由で大阪湾に出る海路が選ばれたものと推定する。船上では輿に鍵がかけられたようである。須磨の浦を過ぎた時に、供の武士が告げると「行平中納言が流されて歌を詠んだところか？」と聞かれたらしい。

余計な話だが「伊勢物語」で知られた業平橋駅が東京スカイツリー駅に変えられてしまったらしいので触れておくと、在原業平の兄が行平なのである。文徳天皇に仕えているときに一時期だが怒られて須磨へ飛ばされた。業平と共に歌人であり百人一首に「立ち別れいなばのやまの峯におふる松とし聞かばいま帰りこむ」が採録されている。

崇徳上皇は、その歌で無く、行平が須磨で詠んだとされる「わくらには問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつ侘ぶと答えよ」を詠じたところか？と聞かれたのである。凡人だと檻に入れられ刑務所に送られる途中で和歌のことを思い出す余裕など無いが、さすがに優雅なのである。そのようにして配所と定められた讃岐国の湊へ到着したのは八月三日のこと。一旦は松山浦の綾高遠堂という場所の、粗末な土牢のような仮設に三年居てから、讃岐国司が、現在の坂出の鼓岡と言う場所に建造

したとされる御所に移され、そこで九年間を過ごした。問題は生活であるが、先の天皇であるから何名かの家来は付いていたが基本的には島流しと同じで都暮らしが再現できる訳ではない。

三年後の「平治の乱」で負けた源頼朝が無期懲役で伊豆国に流された際には、かつての乳母が駆け付けて来て何かと世話をしてくれたけれども、崇徳上皇にはそういう女性も居なかったし、現在の朝廷に怒られるのが怖いから、高貴な囚人としての事務的な待遇しか受けられない。毎日毎日、都の方の空を眺めては「帰りたい！」と嘆くばかりの日々であった。仮設牢に居た三年間に大乘経を五部写経して、それを「せめてもの懺悔の証しに」と都の寺か高野山にでも納めて貰おうとしたのだが朝廷は許さなかった。側近の藤原通憲と信西が反対したらしい。それを聞いた崇徳上皇は経文を海に捨てさせ、それ以来は全てを呪う怨念の塊となっていたのである。

讃岐に流されてから九年経った長寛二年(一一六四)八月二十六日、崇徳院は配所に薨(こう)じられた。享年四十六歳であった―で、御気の毒にと言うことになるのだが、この章は「怪しげな対決」がテーマである。これで終わる訳にはいかない。

何より崇徳院は通常の死では無く朝廷の命令で暗殺されたらしい。崇徳院が恨みに燃えている…という情報を得た朝廷は檢非違使(けびいし)司法官(し)の平康頼を派遣して調べさせた。この人物は、やがて「平家打倒」の最初の会合である「鹿ヶ谷の変」で捕まっているから桓武平氏では無いと思う。その報告で崇徳院が髪を伸ばし目が窪み爪も切らず、天狗のような形相で朝廷を恨み世間を呪い復讐の鬼と化していることを知った朝廷が地元の武

士に命じて殺害させたい。

別の説では「日本国の大魔王になろう…」と自分で舌を噛み切り、流れる血で大乘経に呪咀文を書き付けてから息絶えた、とされる。いずれにしても、怨念の塊になって彼の世へ行ったのであるから長らくお待たせしたが、怨霊界のエースとして崇徳上皇に登場して頂くことになるのである。崇徳院の遺体は讃岐国分寺の北方(香川県坂出)にある白峰山麓の陵に葬られた。

江戸中期に書かれた「雨月物語(上田秋成)」の巻一冒頭は「白峯」という。「白峯」とは崇徳院の御陵のことで西行法師が白峯に詣でた際に体験した怪しい話が書かれている。西行法師は退職して僧になった元・北面の武士であるから二人は知らない関係ではない。西行法師が訪れてみると現地は予想以上に寂しいところで「万乗の君(天皇)にて渡らせ給ふさへ、宿世の業(前世の因縁)というもののおそろしくもそひたてまつりて、罪をのがれさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつづけて涙わき出づるがごとし」―天皇であられたのに何の因果か、この様な場所に…西行法師は崇徳院の霊を供養しようと石の上に座して読経し「松山の浪のけしきはかはらじをかたなく君はなりまさりけり」と歌を詠んだ。「日は没(い)りしほどに、山深き夜のさま常(ただ)ならね、石の牀(ゆか)木の葉の衾(ふすま)いと寒く、神清み骨冷えて、物とはなしに凄じきこちせらる…」―旧暦の十月、山中は寒いがそれとは別に、何か起こりそうな不気味な気配が感じられた。

やがて西行法師は寒さと疲れとで意識不明に近い眠りに襲われるのだが、その時に「圓位、圓位」と繰り返す呼ぶ声に気付いた。武士を捨てて

出家した際の西行法師は「圓位」と名乗っていたという。目を開けると、背が高く痩せ衰えて異様な姿の人ながら、顔も着衣も透けている異形の者が立っていた―此の辺りが怪談の定番ではあるが何とも不思議なところで、真つ暗闇の中に怪しいものの姿は見えるのである。

信仰心の篤い西行法師であるから、非科学的な現象には驚かない。落ち着いて「そこに来られたのは何方(どなた)か？」と質問した。怪人は答えた。「そなたの詠んだ歌に返歌をしよう?…」と、

「松山の浪にながれてこし船のやがてむなくなくりにけるかな」と敵かだが何となく元気の無い声で歌を詠まれてから「嬉しくも、よくぞ詣でてくれた!」と言った。これが崇徳院(の幽霊)であると知った西行法師は涙ながらに、迷わず成仏することを願ったのである。しかし怨念の深い崇徳院は、からからと笑って、国会議員も負けるほどの弁舌をもって国政を非難し、世の乱れを波及し、序に自分の受けた恨みの数々を延々と述べ立てた。西行法師も頑張ったのだが、崇徳院は西行の知らない将来のことまで予見し、特に保元の乱で自分に抵抗した平家の滅亡を断言した。内容ははっきりしないが都を中心に崇徳院の祟り(たり)に適合する出来事が頻発したらしく、何しろ「祟り」の一字がお名前に入っている方の仕出かすことは本格的だったのであろう。

それが原因かどうかは知らないが「崇徳院の怨霊」が市場で高値を呼び、朝廷もあれこれと怨霊鎮めを行ったらしく現地の御陵が整備され、近くの四国八十一番札所となる白峯寺が菩提寺とされて後小松天皇の勅額まで有るらしい。日本国の土着神と思われる大物主命を祀る金刀比羅宮にまで

崇徳院が合祀されるようになった。何よりも驚くのは明治元年と改称された慶応四年(一八六八)の八月、明治天皇が即位の大禮を挙げた翌日に、勅使が崇徳院の御陵に行つて神霊の京都還御を乞い願ひ、水戸光圀の兄の子孫である高松藩主が伏見にこれを奉迎してから、京都に建てた新御廟に安置したと言われる。崇徳上皇の怨霊が七百年ぶりに戻つて来られたのである。

この章では、何らかの恨みを持つて怨霊と化した皆さま方の活躍をご紹介したが、現在まで知られている有名なお方は菅原道真公こと天神様と、神田明神の真の祭神とされる平将門ぐらいであり、失礼かも知れないが他の怨霊諸氏は長い歴史の中に忘れ去られている。七百五十年間も頑張つて来られた崇徳院が金刀比羅宮に祀られていることなど、御存じの方は少ないと思う。

権力の世界では紅白でも黒白でも対立すれば必ず勝者と敗者に分かれる。「勝てば官軍」の原理で負けた者が自分の主張を聞いて貰うことは先ず難しいけれども、都合の良いことに、天変地異とか災害とか人智の及ばない事象が起きると昔の人はそれを「怨霊」の所為にした。いわゆる「判官鼻肩(はんがんびいき)」のように負けた者への憐みの心が、そうさせたのかも知れない。

皇統への繋がりとは異なつても源平両氏は天皇家から出て武士となり、本来は相互に協力して国家の乱を治める立場なのだが、何を勘違いしたのか潰し合いに終始した。紅白に例えれば最終的には源平いずれが勝つたのか?鎌倉幕府を継承した北条氏は平氏系、室町幕府を始めた足利氏は源氏系といわれる。戦国時代となつては、織田信長が平氏に興味を持ったらしいが、源氏も平家も無く、

力の有る者が天下人となる。しかし江戸時代を創りだした徳川家康は源氏を自負していた。源氏が勝ちか?そうでは無く、実は現在の天皇家に平清盛の血筋が伝わっている―として孝証された歴史学の先生が居られた。清盛の娘が何人か公家に嫁ぎ、その家系から江戸時代の天皇が誕生しているらしい。尤も、平清盛が白河法皇の御落胤だとすれば、中途半端な源氏も平家も消えており、皇統は一本であつた、ことになるのだが…。

怨念の塊となつて七百五十年も頑張つていた崇徳上皇に比べれば、皇位を狙つたとされる平将門も、或いは学問の神と仰がれている天神様こと菅原道真公も、一時的には怨霊界に在籍していたとしても、実は誠に穏やかな神様だったのかも知れない。そうでなければ、現代まで庶民に受け入れられている筈がないのである。

(第五章 終)

## 工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で  
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465  
Tel 0299-55-4411

## 【風の談話室】

もう一月である。口の移ろい、時の移ろいは実に早いものである。今年ももう半分が過ぎ去って行ったのである。時を数えるのは、歳をとった証拠と言われるが、拙い刊行物でも毎月となるべく、会員の負担も小さくなく、いついつの時の移ろいを数えてしまおう。

そんなゆるさと風の会会報に今月は、我々勝手に隣町の友人と呼んでいる、陸平を「トインシヨ」する会の市川会長から、風の会を「トインシヨ」する文を頂いた。

陸平を「トインシヨ」する会の皆さんには、半ば強制的に投稿を頂いているのであるが、有難いことである。特に、田島早苗さんには、一ヶ月お休みになったでしようかと督促する「等」を感じて毎月投稿いただいている。

改めて、陸平を「トインシヨ」する会の皆さんには、お礼を申し上げる次第である。今後とも宜しく御付き合ひ頂けようとお願ひいたします。

## 【トインシヨ広場】（陸平をトインシヨする会）

祝「風」七周年

市川紀行

書き続け刊行し続けて7年、この意思欲たるや並みものではない。そして内容もおおざなりは無く毎回「そうか、そうだね、いやそうかな」など勝手に興味関心を引き起こされ、うなずいたりしている。

「ふるさとルネサンス塾」からの経緯経過、ひとり去りふたり去りの石岡まちづくり情景も、私自身も味わった「文化の悲哀」の象徴としてほ

えましいが、しかしいつでも「闘い」はそこから始まるのだ。美しきもの、よきものは常に少数者のものだ。そこからひかり出せばいいだけさ。たとえやせ我慢でも真の少数精鋭ありだ。

「七人の侍」も最後はふるさとびとに「ふるさと」を残したように七名のメンバーはまた先の七年を目指してくださるだろう。これはもう新しい伝説であり、逆説的だが「歴史のまち」石岡につよい啓示を与えることだろう。

主宰白井氏の面白いほど多彩なことばの展開、詩的言辭への深い信頼、脚本演出家としての奔放な発想はいつも刺激的であり、氏はそりやないぜと云うだろうが「生きてあることの嬉しさ、懐かしさ、自由さ」を感じさせてくれる。文化の創造の由来である。旧来のまちづくりを叫ぶ面々にもっとも欠けている資質、感性である。氏とは同年代で似たような青春時代をもった。物質的に貧しかろうと、いまにない「活き活きとした」青春時代である。初対面のときから気心がすつと通じたの思い出す。氏とともに、それを「夢を食うばく」みたいにいまも引きずっているのだとしたら、ここまできたら最後まで行くしかないよねと微苦笑止みがたしではある。小生の詩の朗読など一方的恩恵に対し改めて御礼を表するしだいである。

打田昇三氏の「歴史読本」もその造詣の深さと独自性によつて従来の方見方を新しくさせられる。時にはユーモラスな表現で気をほぐしてくれる。何処でどんな勉強研究をされ、またされてきたのか、そのエネルギーは何処から来るのかといつも不思議な思いにとらわれます。あの「失われた九州王朝」の古田武彦を始めて読み、感動してほぼすべての著書と呼んだけれど、古田史学の音調

を打田史学に感じるといったら叱られるだろうか。通説ばかりでは時代の姿は見えない。ユニークさの中に点在する視点こそ歴史の真実を照らすのだと思う。

菅原茂美氏の文章にも長らく接してきた。直接存知あげないがいつも強烈な批評と見解に納得させられる。多少の相違はいつでもあることで、氏の幅広く深い専門学識と地球人類史的観点からの指摘は愉快である。毎回長文のエッセイ評論をまとめる姿は圧巻というしかない。これからも圧倒されることを楽しみにしている。「七人の侍」の三船敏郎役と言うべき存在感だ。

舞姫小林幸枝さん、兼平ちえこさん、伊東弓子さんの女性陣、新加入の木村進氏の柔らかな語り口もいつも楽しみだ。かくれた愛読者のため一層の活動発展継続を願うしだいである。（女性陣も七人の侍に入れさせていただきます。あしからず。）

以上七周年のお祝いをこめてつい失礼なことばかり書いてしまったが、ことば座の今公演「振り返ればそこに恋歌が」に関してひとつだけ記したい。「新鈴姫・新鈴ヶ池物語」である。常には姫は哀れに悲しく天に去っていくものだが、今回の鈴姫の恐ろしさ、不気味さ、怪しさはどうだ。見ていてぞくぞくした。肌寒さを覚えた。朗読の冴えもさることながらこのように理解されうる伝説の発掘と表現は石岡の昔物語に新局面を加えたのだと云うべきだろう。これもことば座だけでなく「風七年」のもたらしたものといえる。

最後にことば座東京公演を楽しみにしているとエールを送りたい。美浦では小バスを仕立てる観劇チームを計画中である。乱文多謝。



「富士山が世界文化遺産に登録されたというニュースを見て、真つ先に思い浮かべたのは亡母の笑顔だった。岐阜から茨城へ新幹線に乗って孫の顔を見に来る度に「今日は富士山がきれいに見えた」と嬉しそうに話す母の、結婚以来苦勞の連続だった日々をくぐり抜け、漸く訪れた平和を築きむ満ち足りた笑顔に出会うのがこの上ない喜びだった。しかし、沖繩の人々には戦後の平和を慈しむ日々は未だ訪れていない。

沖繩の犠牲者を悼む「慰霊の日」六月二十三日を迎えるに当たり、新聞やテレビが特集を組み、未だ解決の兆しすら見えない戦後処理に対する沖繩県民の悲しみや怒りを伝えて居る。所有者不明の土地が六十八年間放置されたままと言う話には背筋が寒くなる思い。千人以上が集団自決に追い込まれ、一家全滅千三百世帯以上と言われる悲惨な沖繩戦で、やつと生き残った多くの孤児達は、父祖の地の所有者として名乗り出ることさえ出来ないまま、学校にも満足に行かぬ、苦しい人生を歩いて来たという。「自分の土地であって、自分の物でない」何とかしてあげて！

基地が出来るとき、大型船が入港できる様に港の拡張が行われ、父祖の墓が海に沈んだという人には「せめて私の生きてる中に墓地を取り戻し、先祖を祀りたい」と病身にむち打って役所通いを続けているが埒が開かないという。ややこしい法律の壁とやりに阻まれていくのか。戦争の足音が聞えそうな改憲論よりも先になすべき事は何か、施政者にとくと考えて欲しいとは、婆の繰り言。

沖繩の悲惨な現状のテレビに涙を零し、暗く沈んだ心に明かりを灯してくれたのは、Eテレの再放送「三浦雄一郎特集」だった。人間の可能性に挑戦続ける男にも、アクシデントに見舞われたり、命の危険に曝されたこともあったが、何時も前向きな思考で、積み重ねた経験と直感に助けられてきた。

マイナス六十度の南極で、腕が瞬間冷凍に成ってしまったとき、直感の閃きですぐに走りだし、体温を上げたら自然解凍できて凍傷を免れた三浦氏、その若々しい行動に脱帽。

ヒマラヤで大雪崩に遭遇したとき、子供の時に出会った雪崩の記憶が甦り、スキーを上に向けて助かったとか。「ジェット機が二百機くらい降りてきたようなものすごい音がして、今度ばかりは駄目かと思いましたが」笑いながら語る三浦氏の生命力に乾杯。山は天候を見誤れば死に直結する。情報の集積力と分析力、そしてシェルパとの信頼関係が大切だから、経験を積み重ね、学ぶ努力は怠りないが、時には得意の料理でシェルパと心の交流を交わすことも忘れない「命がけで楽しくやろう」が三浦氏のモットーだという。

二十代でスキー界から永久追放という憂き目に遭いそれを転機にスキーの冒険家三浦雄一郎が誕生した。何が幸いするか判らぬから人生は面白い。三十三才の時富士山頂から五合目までのスキー直滑降に挑戦、ほとんど垂直の斜面を降りる危険防止のために、落下傘をブレーキにしようと言う前代未聞の方法を試し見事に成功を収めた。これが

パラグライダーのルーツだとか。淡々と語る三浦氏の言葉だが、そこに行き着くまでの周囲の心配や反対を押し切った実行力と度胸に胸が詰まる。

七十才でエベレスト登頂に成功、この時体力をつけるため始めたトレイルニングが凄まじい。片足4.5キロ、両足で9キロの重りをつけ、20キロのリュックを背負い週三日、三〜六時間の散歩をする。さらに三億〜二十億とも言われる資金を自分で調達するために、松下幸之助他有名なベンチャー起業家に面会を申し込んで直接交渉、理解と援助を取り付けたという。この行動力は半端じゃない。

その後目標を失って運動不足と美食に溺れ、たちまち体重が増えメダボに陥った話には、鉄人三浦も普通の人間なんだと思わずニンマリ。でも成人病の宝庫でこのままだと余命も幾ばくもないと医師から告げられてからの三浦氏は違っていた。「自分を越えてみたい」と大腸ガンの手術も乗り越え、以前の過酷なトレイルニングを再開、七十五才で二度目のエベレスト登頂を果たし、その時八十才でチョモランマに立つと誓ったという。それが今度の傘寿記念登山につながったのだ。

- ・くよくよするな、でも諦めるな
  - ・周囲一回肉をしつかり食べる
  - ・高齢化社会の新しい可能性
  - ・自然が変える子供達
  - ・運は努力しなければ掴めない
  - ・日常生活からちよつと離れて動いてみる
  - ・どん底からの冒険を面白がれ
- 三浦語録の素晴らしさを胸に、及ばずながら私も、もう少し頑張れるかな。

## 【ことば座だより】

東京公演への準備整う

白井啓治

稽古開始直前でキャストイングに少しバタついたが、漸く決まり、いよいよ本格的な稽古に入ることとなる。

十月の東京公演は、伊藤道郎に捧げる日本組曲と三つのジェスチャーと銘打ち、平将門伝説・荻萱日物語を行う事となる。三つのジェスチャーとは、伊藤道郎がダルクローズのリトミックをもとに創りだしたメソッド・テンジェスチャー、ヨネヤママモコのダンスマイム、小林幸枝の手話舞である。この三つのジェスチャーが、それぞれ物語のテーマ、主人公の平将門そして荻萱姫の心の真実を、ホルストが伊藤道郎のために作曲した日本組曲を中核にして表現していく舞台である。

キャストイングに難渋したのは、荻萱姫物語として三つのジェスチャーを繋ぐ物語ガイドの部分であった。当初は舞による鎖連読の様な群舞にするつもりでいたのであったが、十分な人数が集まらない事から、演出プランの変更が余儀なくされたからであった。

しかし、この事が逆に良い結果を生む事となった。何かにつけて既成の物をそのままに間にあわすことの嫌いな小生、マモコさんの内弟子の方が一部出演を予定していたことから、その内弟子の方にマイムに手話を加えた、舞夢語りなる新表現をお願いすることにしたのであった。

面白好きのマモコさん、この話に乗って下さり内弟子の明神さんにこの役を引き受けて貰う事となったのである。

マイムを舞夢と当て字するなど非常に安直だと言われてしまいそうであるが、この舞夢は小林幸枝の行っている手話舞の進化形、発展形と言えるものである。手話そのものが動作言語であり、パントマイムはボディーパーフォーマンスである事を考えると両者には違和するものがないのである。窮すれば通ずではないが、壁にぶつかるといのは、そこに何か新しいことの発見・想像があるという事である。そのことを楽しみ、面白がる事が表現創造の醍醐味と言えるだろう。

こんな表現の舞物語で日本組曲を、道郎に捧げると銘打って公演されるとは、モダンダンスのパイオニアとしての伊藤道郎聖者も、あの世から見下ろし、さぞかし驚かれることと思う。

こんな風に、独りよがりな勝手なことを思いつき実践に移しているのであるが、こうした悪戯心に、面白い、面白いと言って載って下さるマモコさんは流石に聖女である。八十に届こうという御年で、若き時代の作品を見直し、改めて現在の自分の作品として再構築して積極的に表現の場を作っておられる力は、やはり聖女ならではの面白がりにあるのではないだろうか。

十月公演は、小林幸枝にとつては今後の大きな財産となるであろう。乞うご期待である。

口の、時の移ろいの美に早く感じられるとは言ってみだが、それは年齢の所為ばかりではないだろう。あれもこれもやりたいことが裡の中に散満していて收拾がつかないという方が正しいのかも知れない。

打田昇三兄が、長編作品を書き上げると面白く平家物語の私訳に取り組まれている。

平家物語と言っても全編の私訳となると、十二巻なので大層な分量である。現在巻の二に入った所だから、それこそもう七月かと移ろう時の早さを嘆いているに違いない。

もう爺さんになったのだからそんなに欲もあるまいなどは、とんでもない。何もやる事がなくぼやとしていたものならば時の移ろい等気にもしないだろうが、何かをやっていると、その事から次々にと枝葉が伸びてきます。ますますやる事が増えてくるものである。

老いて益々口警況になり、歯がないくせい。若い時以上に美食を望むようになる。本当に老いて益々である。

ふるさと風の会では、皆様の投稿文を募集しております。毎月30日が締切日です。ぜひご投稿いただけます。ごお願いいたします。(ひろぞ)

## 《ふる》

アレンジ蕎麦・蕎麦会席料理のお店です。

(キター文化館通)

看板娘(大)「つひら」ちゃん

皆さんの歓迎いたします。

電話0299-470-6000

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>